

グループ学習における評価の在り方について —音楽科指導における一考察—

日高 まり子

1. はじめに

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」とする文部科学省の中央教育審議会答申(2014)において、「学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的学修」を大学教育において、従来の知識の伝達・注入を中心とした講義から、学生が主体性をもって取り組む講義内容としてのアクティブ・ラーニングを提唱した。

「能動的学修(アクティブ・ラーニング)」は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」中央教育審議会答申(2012)において「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」とされ、授業改善の必要性を示されている。変化に激しい21世紀の社会では一人一人の可能性をより一層伸ばし、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育てていくことを目指し、アクティブ・ラーニングによる授業改善を目指すとされている。学修者が意欲を持って主体的・協働的に学ぶ授業の構築に向け、指導者はどのような計画や方法等が効果的であるかを検証していくことが必要である。初等中等教育における教育課程の基準等の在り方についての文部科学大臣諮問には、『「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があり、こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的である。』さらに『学習・指導方法の改革と併せて、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方についても、同様の視点から改善を図る必要がある。』と述べられている。

グループ学習は講義における学習形態のひとつであり、シラバスにおいてもアクティブ・ラーニングとしてペアワークやグループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション等として積極的に取り入れられている。講義科目や講義内容によりそのグループ学習の評価の観点や位置づけ、総合的な評価の割合など相違があるところではある。しかし、そのグループ学習における評価についての基準を設定することで評価の根拠を共有化し、評価を明確化できると考えられる。

音楽科の学修における表現活動は学修内容において割合の高い学修要素で、そこでは様々なグループ学習が展開される。学生の音楽経験やシラバスにおける演習等での体験をふまえ、学生の音楽の学修活動における意欲を高めるために、講義の工夫改善、指導者の指導の在り方にも目を向け学生の意欲向上を図らなければならない。本稿においては音楽科の学修におけるグループ学習における評価の在り方について音楽科の指導の取り組みから一考察したいと考える。

2. 音楽科におけるアクティブ・ラーニングのグループ評価の取組

アクティブ・ラーニングは学修者の能動的な学修への参加で対話的な学びの能力を育成するものであり、音楽科における学修活動は、アクティブ・ラーニングの要素を使った内容で常時取り組まれている活動である。市川(2017)は論文「学校における音楽教育」において「学生自身がいかにより意欲をもって主体的、積極的に授業に参加できるようにするか、まさにアクティブ・ラーニングの手法を適切に取り入れなければならない。音楽はもともと体験を通して学ぶものであり、個々が能動的に取り組まなければ成立しない教科である。一人一人の感性を大切に、主体的に学べるよう体験の仕方を工夫すること、目指す表現をするための問題解決的な学びをすること、課題解決に向けて協働的な学びができる学習形態の工夫等の取り組みが大切である。このようなアクティブな教授法を取り入れることにより、音楽に関する教養、知識、知覚力を身に付けるだけでなく、倫理的、社会的な能力を身につけることができると考える。「感動する心」と「共感する心」を育てることを中核に据え、音楽的な力、思考力・判断力・表現力・社会性が身に付けられるようその指導法を体験できるようにしていくことが、学生たちが音楽の授業を構築していくための一助になると考える。」と述べている。また市川(2017)は、「共感する心」を育むために「アクティブ・ラーニングの手法として授業形態を工夫し、いかに学生同士が学び合って表現する場をつくることも大切な要素である」と述べている。加えて「教師が一方向的に講義をするということではなく、全体で学び、ペアで学び、グループで学ぶ等、学びの形態を学習内容によって適切に組み合わせて授業を仕組むことが大切である。教師が一方向的に教えるよりも、学生同士の学び合いは確実に力を向上させ、学びに向かう姿勢や意欲の向上を図ることができる。」と述べている。

音楽科の評価においても、例えば全体の歌唱活動において、活動の評価はその活動の中で、全体、グループ、個人の感想等の言語的評価は見られるものの教員と学生との間で感覚的になされているのが現状であり、音楽科のもつ教科の特性にも関係するのではあるが、評価が可視化されにくい一面も持つ。音程や発声、発音、楽曲の特徴にあわせた音楽的な表現など技術に関する評価では教員の指導などによる相互の言語的なやり取りが行われ、音楽的な感性を主観的に場面評価している。ペアワークや数名のグループワークでの活動においても、発表などの課題に向けてそれぞれに協議を重ね、プレゼンテーションや演奏発表へと積極的に取り組まれている。しかし、講義後に提出させる授業のまとめレポートへの記入された記録では講義のねらいが十分に反映されていないことが多い。その評価においては、評価の観点の指標づくりや評価の方法などの課題解決の必要性もあり、十分な取り組みができていない。そこで、授業実践の中において、グループ評価について評価の視点を明確にし、自己評価および相互評価について評価表を使用した学生評価を音楽科におけるグループ学習評価として取り組んだ。

3. 評価の方法

グループ評価を実施するにあたり、講義の題材にあわせて、評価を以下の4つに分け評価表を作成する。学生は以下の①②③について記入し提出をする。グループ活動の内容によっては①～③のいずれかを選択した評価を提出する。提出された評価表を教員が集約し、④の評価を加える。講義全体の評価は、実践されたグループ活動の評価を合計し、学期末試験や実技試験の結果を加え、総合して評定を示す。

- ① 学生の自己評価
 - ・評価記入用紙への記入、提出
- ② グループ構成者相互評価
 - ・評価記入用紙への記入、提出
- ③ 他者評価（グループ発表の相互評価）
 - ・評価記入用紙への記入、提出

④ 教員の評価（数値化する）

- ・評価記入用紙の配布及び回収、集約、評価
- ・参加観察評価・・・出席回数も参加観察の評価資料とする。
- ・レポート評価、シラバス内容・講義資料からの小テスト評価、学期末試験評価

4. 音楽科におけるグループ学習の取組概要

音楽科の講義においては、すべての学修内容にグループ学習を取り入れている。表1はそれらの学修の中から実施事例の概要をまとめたものである。評価においては、主に授業後の各学生による授業のレポート、グループ学習の自己評価、グループ評価、他のグループとの相互評価を実施した。

グループ学習の評価の観点としては、学生の評価の観点として①協議意欲、②貢献度、③協議の深まり、教員の評価の観点としては、①参加意欲、②理解度を基本として題材内容に合わせた項目を設定した。

表1：取り組みの概要 事例(2019年度)

| 講義名 | 講義内容 | グループ学習形態(例) | 評価項目 |
|----------|--|--|--|
| こどもの音楽活動 | 音楽活動を展開するための基礎的な知識、技能を習得する 理論的・実践的学習を行う。 | 器楽(合奏、アンサンブル) 歌唱(合唱、ヴォーカルアンサンブル)、身体表現 ・ヴォーカルアンサンブル;「もみじ」 ・器楽合奏;「八木節」 ・合唱;「君をのせて」「おんがくのおくりもの」 「あの青い空のように」「旅立ちの日に」「My Way」等 | ① 協議意欲 ② 貢献度 ③ 協議の深まり ④ 授業レポート ⑤ 参加意欲態度 ⑥ 確認テスト ⑦ 相互評価 |
| 音楽と遊び | こどもの発達に応じた目的に合った様々な音楽活動を実習し、こどもの主体的な表現を促す知識や技能を学ぶ。 | 器楽(合奏、アンサンブル) 歌唱(合唱、ヴォーカルアンサンブル) リズム遊び(リズムアンサンブル)、楽器遊び、歌遊び、わらべうた、パネルシアター、ペープサート、音付け読み聞かせ 身体表現 リズムアンサンブル;「はらっぱ TrioNo1/2」 身体表現;「かもつれっしょ」「ひらいたひらいた」 「十五夜さんのもちつきで」「茶つみ」等 パネルシアター;「すうじのうた」「ドロップスのうた」「山の音楽家」「ゆかいな牧場」「おはようクレヨン」等 | ① 協議意欲 ② 貢献度 ③ 協議の深まり ④ 授業レポート ⑤ 参加意欲態度 ⑥ 確認テスト ⑦ 相互評価 |
| 音楽 | 音楽についての基礎的な知識と演奏後術を習得する。 | 器楽(合奏、アンサンブル) 歌唱(合唱、ヴォーカルアンサンブル、身体表現 鍵盤ハーモニカアンサンブル;「チャチャマンボ」 リコーダーアンサンブル;「エーデルワイス」 オペレッタ合唱;「ぞうれっしゃがやってきた」 | ① 協議意欲 ② 貢献度 ③ 協議の深まり ④ 授業レポート ⑤ 参加意欲態度 |

| | | | |
|---------------|---|---|--|
| | | あそびうたグループ演習；「すうじのうた」どろっぶすのうた」「山の音楽家」「おはようクレヨン」等 | ⑥ 確認テスト ⑦ 相互評価 |
| 音楽科教育法 | 小学校学習指導要領 音楽の目標や内容を理解し、共通教材曲を使った具体的な模擬授業を通して音楽の指導法について学ぶ。 | 模擬授業 器楽（合奏、アンサンブル） 歌唱（合唱、ヴォーカルアンサンブル） 小学校共通歌歌唱教材 24 曲 | ① 模擬授業振り返りレポート ② 授業レポート ③ 模擬授業学習指導案 ④ 模擬テスト |
| 保育内容指導法（音楽表現） | 音楽あそびの体験を通して音や音楽とからだの動きや表情などの表現の相互関係を理解し、遊びを体得しながら音楽表現活動について理解する。 | リズム遊び、楽器遊び、歌遊び、身体表現、わらべうた、パネルシアター、ペープサート、音付け絵本 読み聞かせ 模擬活動 (参考教材) 「うったておどっぺおもちやばこ」「こどものうたベストテン」「幼児の音楽教育」 デュエット；「もりのくまさん」 模擬活動；「おもちゃのチャチャチャ」「アイアイ」 「アイスクリームのうた」「宇宙船ののって」「そうだったらいいのになあ」「犬のおまわりさん」「大きな古時計」 | ① 協議意欲 ② 貢献度 ③ 協議の深まり ④ 授業レポート ⑤ 参加意欲態度 ⑥ 確認テスト ⑦ 相互評価 |

5. 音楽科の授業におけるグループ評価の方法

(1) こどもの音楽活動

「ヴォーカルアンサンブルを楽しもう ～「もみじ」を歌おう～」90分授業×4コマ

テーマ：4名のグループでヴォーカルアンサンブルに取り組む。課題曲は「もみじ」を二部合唱の旋律を使って歌う。演奏では1番と2番でパートを交替してアンサンブルをする。

【展開Ⅰ】テーマについての説明、課題曲の理解

ヴォーカルアンサンブル学修について理解をする。発声や発音などの歌唱の技術について学び、体験し、技能を向上させる。

- ・資料を配布し、授業内容（音楽的な内容を考えて演奏の仕方をグループで協議し、練習して演奏の工夫をする。それぞれのグループで発表し、その発表について他のグループが評価をする。）について説明をする。
- ・単元、題材の内容理解をさせるとともに、グループ学習での課題を明確に示す。
- ・グループ活動の内容として、歌唱表現、準備等の練習計画を立てることを伝える。
- ・自己評価表を配布（例1）しグループ活動への自分自身の貢献度等についての評価の方法を示す。

- ・歌唱表現についての理解、課題曲演奏等の演習をする。「もみじ」の旋律を理解して各パートを練習する。歌詞や旋律の特徴など曲想を感じて歌唱練習する。

【展開Ⅱ】グループ分け、グループ協議、演奏の練習、発表準備

- ・4名のグループを決定する。
- ・編成されたメンバーでのグループ協議を課題に沿って実施する。
- ・協議内容をふまえて発表練習をする。(授業外での練習も含む。)
- ・個人のグループ学習における自己評価の提示

【展開Ⅲ】グループ グループ協議の様子 評価及び他者評価・柁 グループ練習の様子

- ・グループ発表をする。
- ・グループ発表を学生が相互評価する。(例2)
- ・自己評価をまとめる。

【評価表】

[自己評価のための評価表 (例1)]

この自己評価のための評価表は、グループ活動での協議や練習での工夫点を記述させ、毎時間のグループ活動を明確にして取り組ませることができる内容とした。グループ内での協議では、他者の意見を聞くことや表現活動への主体的な取り組みを記述することで、自己の学修を振り返り学修内容の定着を図るものとした。また、評価としては5段階の数値評価とし、授業後のレポート記入時に短時間で記入できる形式にした。

自己評価のための評価表 (例1)

| こどもの音楽活動 「もみじ」グループ発表の記録 | |
|--|-------------------|
| 1 グループで協議したことをまとめましょう。 | |
| グループメンバー名 | |
| 協議内容のまとめ | 楽曲の表現のグループの工夫について |
| | 自分の演奏に対するアイデア、工夫点 |
| 2 自分自身のグループ活動への参加を振り返ろう。 | |
| 評価内容 | 自己評価 |
| グループ活動の話し合いへの取組 | 5・4・3・2・1 |
| グループ活動への協力の意欲 | 5・4・3・2・1 |
| グループ発表の練習への取組 | 5・4・3・2・1 |
| グループ発表の取組 | 5・4・3・2・1 |
| 5:大変良くできた 4:良くできた 3:できた 2:あまりできなかった 1:できなかった | |

「協議内容のまとめ」のレポートでは、「歌詞の意味と旋律の表現を話し合って工夫した。」や「歌詞からみんなで情景を創造して歌う工夫を話し合った。」「自分のパートに責任をもって歌えるように個別での練習を工夫した。」などの記述内容から、ヴォーカルアンサンブルの技能の習得に向けての個別の課題とグループでの演奏の課題が明確になっていることがわかる。また、グループ活動によって、個別では理解できなかった内容が他者との協議により解決され、他者の模倣などの有効なグループ学修の展開により楽曲演奏のための実践的理解が深まっていることも伺える。実際の授業場面でも積極

的なグループ学習が行われている様子を見ることができた。そこでは技能力の差からリーダー的な存在の必要性も見られた。グループの構成メンバーによってはグループ学習の成果に違いが見られ、協議や練習内容などグループを構成する学生の技能力を配慮したグループ作りへの配慮も必要であった。

グループ相互評価表（例2）

| グループ発表評価 「もみじアンサンブル」 | | |
|--|-----------|-----|
| 5：大変良くできた 4：良くできた 3：できた 2：あまりできなかった 1：できなかった | | |
| 評価内容 | グループ発表の評価 | 合計点 |
| グループ発表の態度 | 5・4・3・2・1 | |
| グループ発表の歌声 | 5・4・3・2・1 | |
| グループ発表の身体表現 | 5・4・3・2・1 | |
| グループ発表全体の完成度 | 5・4・3・2・1 | |

グループ相互評価では、グループの発表を他のグループによる他者評価とした(例2)。自己評価と同じ5段階の数値評価とし、評価の基準を同じにすることとした。各項目の合計点と全体合計点を計算し、各グループの相互評価として集計した。

自己評価を集計するとグループ発表の態度の項目では、5段階評価（85%）4段階評価（15%）、グループ発表の歌声の項目では5段階評価（82%）4段階評価（13%）、グループ発表の身体表現の項目では5段階評価（72%）4段階評価（28%）、グループ発表全体の完成度の項目では5段階評価（70%）4段階評価（28%）3段階評価（2%）であった。1段階評価、2段階評価を選択した学生はいなかった。項目別の自己評価に関しては高評価をしていることがわかる。合計点では、20点評価（65%）19点評価（5%）18点評価（8%）17点評価（8%）16点評価（10%）であった。個人内評価においては自己の取組について少なからず課題があったことを意識できたのではないかと考えられる。レポートでの振り返りでは表現活動での感想が主な記述になっていることが多いが、毎回の自己評価を積み重ねる中で、グループ活動のねらいを明確にすることができ、主体的な参加がなされ、グループ活動における自己の協議意欲やグループへの貢献度などに意識を向けることができているのではないかと考える。

(2) 保育内容指導法（音楽表現）

「あそびうた 模擬活動づくり グループ演習」90分授業×4コマ

テーマ：各グループ（5～7名）に割り当てられた「あそびうた」の指導について模擬活動計画をグループで作成する。その指導計画にそって模擬活動を発表する。

【展開Ⅰ】 テーマについての説明、課題曲の理解、グループ分け

- ・資料を配布し、授業内容（あそびうた7曲：「おもちゃのチャチャチャ」「アイアイ」「アイスクリームのうた」「宇宙船にのって」「そうだったらいいのにな」「いぬのおまわりさん」「大きな古時計」を提示しグループが担当して 模擬活動を計画して全体発表すること）について説明をする。
- ・単元、題材の内容理解をさせるとともに、グループ学習での課題を明確に示す。
- ・グループ活動の内容として、あそびうたの活動を協議すること、身体表現や歌唱表現、準備等の練習計画を立てることを伝える。
- ・自己評価表を配布し、グループ活動への自分自身の貢献度等についての評価の方法を示す。
- ・7グループを決定する(カードを準備してくじ引きをして無作為なグループ編成をする。)

【展開Ⅱ】 グループ協議 ・・・・個人のグループ学習における自己評価の提示

- ・編成されたメンバーでのグループ協議を課題に沿って実施する。
- ・協議内容をふまえて発表準備、教材づくり、発表練習をする。

【展開Ⅲ】 グループ協議、演奏の練習、発表準備・

- ・題材における活動計画を示し、活動内容を明確にする。
- ・協議や演奏の参加への主体性を向上させる。
- ・協議内容の記録や毎時間の自己評価をする。

【展開Ⅳ】 グループ発表

- ・自己評価（配布資料⑤）及びグループ発表評価表：他者評価・相互評価の提示（配布資料⑥）
- ・模擬動計画表の提出（全員）

配布資料⑤

あそび歌 模擬活動作り 自己評価

| 作品名 | まとめ | 評価 | | | | |
|----------|-----|----|---|---|---|---|
| 協議への取り組み | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 製作への取り組み | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 発表への取り組み | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

自己評価の記述レポートからは、グループ活動への参加意欲の向上やグループ学習の課題の理解が明確であり、授業前の学修への動機づけにもつながっている記述が見られた。また、グループにおける自己の役割を確認し自己有用感につながったり、授業外での自己学修時間の増加や講義時間外でのグループによる協議や教材製作など主体的な活動につながったりする記述も見られる。

配布資料⑥

グループ発表評価表

| | 教材曲名 | 教材 | | | | | 内容 | | | | | 発表 | | | | | 合計 |
|---|-------------|----|---|---|---|---|----|---|---|---|---|----|---|---|---|---|----|
| 1 | おもちゃのチャチャチャ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 2 | アイアイ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 3 | アイスクリームのうた | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 4 | 宇宙船にのって | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 5 | そうだったらいいのにな | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 6 | いぬのおまわりさん | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 7 | 大きな古時計 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 総 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 評 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 全体評価 | | | | | | | | | | | | | | | | |

他者評価・相互評価としてグループ発表評価(配布資料⑥)をした。各グループの評価点数の合計を集計すると「おもちゃのチャチャチャ」(13.3点)、「アイアイ」(14点)、「アイスクリームのうた」(14.8点)、「宇宙船にのって」(13.2点)、「そうだったらいいのにな」(13点)、「いぬのおまわりさん」(14.9点)、「大きな古時計」(13.3点)であった。15点満点であるので、評価得点としては高得点

ではあるが、教材、内容、発表という項目での評価をみると、それぞれのグループ活動について他者評価として発表の優劣をつけていると伺える点数分布が出現している。また、相互評価(全体評価)レポートからは、題材の課題意識をもって取り組んでいる記述が多く見られ、主体的なグループ活動への取り組みがなされていることがわかる。他者批評から自分たちのグループ発表の振り返り、次への課題、自己評価へとつながっているのが読み取れる。配布資料⑤⑥の点数での評価は項目別の評価項目を設定したが、高得点を示したが、レポート評価とあわせると個別の自己評価、他者評価を比較することができる。

6. 考察

この研究では、課題提示からグループ協議を通して発表までの過程を自己のグループ内評価、グループ評価、相互評価のそれぞれの評価表を作成して、その有用性について検証した。グループの評価についての学生の学修効果として、主体的で能動的な問題解決に向けた学修の姿勢の確立、知識の獲得向上、相互批評的な思考力や問題解決力の育成向上、学生間におけるコミュニケーションスキルの活性化などが挙げられる。

音楽科の学修指導においては歌唱や器楽、音楽づくりなどのグループ活動での表現活動を通して音楽の特徴、特性を学び音楽表現の工夫のための思考判断力を培うことができる。ここでは、表現活動を行うための知識理解と技能の習得、そして表現への興味関心の向上・能動的参加態度の育成へと学修が主体的に発展していくことを目指すものであるが、グループ学習によって生み出される学生同士の対話やコミュニケーション活動により学生個々の学びのスキルアップにつながっていると考える。また、他者評価・相互評価は、他者理解につなげクリティカルシンキング(批判的思考力)が育成され、自分の思考について客観的視点を持つことにつながる。相互評価においては、評価される段階ではグループの発表や個人の技能等についての評価もされるが、相互にそれぞれの表現の工夫に気づき、自己の表現をより高め、学生間の技能の向上を促進させることができると考える。

グループ評価の実際においては、学習のテーマやねらいが明確に示され、短時間での評価が可視化できることが必要である。評価項目として「協議意欲」「グループへの貢献度」「グループの協議の深まり」としたが、活動内容によっては学生が評価しにくいと感じた場面もあり、題材や学修課題によって項目を設定しなおす必要性も感じられた。他者評価においては、他者の批判だけになるのではなく相乗効果のある評価とするために記述による振り返りも取り入れた。言語化された批評を自己評価、自己の課題への気づきとし、次への学修への意欲付けへとつなげていくことも大切であると感じた。講義への参加が受身ではなく、積極的に参加する講義としての評価へとつながるものであり、学生の意識の変容を見ることができると考える。

7. まとめ

大学の教育に求められている指導の質の転換においては、学修者が意欲を持って主体的・協働的に学ぶ授業の構築であろう。「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。」と「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」中央教育審議会答申(平成24年8月28日)において提言され、授業改善の必要性を示されている。変化に激しい21世紀の社会では一人一人の可能性をより一層伸ばし、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育んでいくこと

を目指し、アクティブ・ラーニングによる授業改善を目指す指導者はどのような計画や方法等が効果的であるかを検証していくことが必要である。

本研究においては、その指導におけるグループ活動部分の評価を主体的に行うことで学生にどのような変容を求めることができるかをさまざまな指導場面で検証した。グループ活動の評価を通して、学生が主体的に課題解決学習へと取り組んでいくことを目指し、講義、演習等の能動的学修への転換をはかるものである。教員からの一方向からの学びではなく、学生との双方向の授業への転換であるとする。

昨年度から、講義においての評価を実施しているが、レポート形式の記述式の振り返りに加えて、実施時間における数値選択評価を取り入れることで、可視化した自己評価となり、学生の学修への意識の変化を学生自身と指導者の双方の共通評価ともできる。来年度もグループ学習の効果を検証し、各教員が指導の在り方について振り返る資料とできるように検証を続け、他教科との共有性も図られるような評価表を思案していきたいと考える。

グループ活動評価と成績の相関をどのようにつなげていくかについては、「大学教育におけるアクティブ・ラーニングの評価と成績の関係」(小山・溝上 2017)や「アクティブ・ラーニングの学習効果に関する検証」(杉山・辻 2014)などの先行研究などを検証し、今後の課題としていきたい。

参考資料・文献

- 市川郁子(2017)「学校における音楽教育」大谷学会学報第 96 巻 1 号(大谷大学・大谷学会) P14
- 小山理子・溝上慎一(2017「講義型授業とアクティブ・ラーニング型授業への取り組み方が学習成果に及ぼす影響」)名古屋高等教育研究第 17 号 P101~121
- 新実徳英(2013)「小学音楽おんがくのおくりもの教師用指導書研究編」教育出版
- 杉山成・辻義人(2014)「アクティブ・ラーニングの学習効果に関する検証ーグループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較によるー」小樽商科大学紀要論文人文研究第 127 輯 P61~74
- 吉富功修・三村真弓編著(2010)第 3 版小学校音楽科教育法「学力の構築を目指して」ふくろう出版
- 中央教育審議会答申(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」文部科学省
- 中央教育審議会答申(2012)「能動的学修(アクティブ・ラーニング)」は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」文部科学省
- 中央教育審議会答申(2016)「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省
- 小学校学習指導要領(2017)文部科学省
- 小学校学習指導要領解説音楽編(2017)文部科学省
- 文部科学大臣諮問(2014)「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」文部科学省
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm (2019/11/22 アクセス)